



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1982 精道教育促進協会(〒575 岸屋)三三・三四五 一宮尾市船戸町12-1-6

教皇様の叢

七つの秘跡 (II)

今回のヨハネ・パウロ二世教皇の英国及びウェールズ訪問の全般的テーマは、七つの秘跡でした。ロンドン・ウェストミンスター大聖堂では四人に洗礼を、そして、南ロンドン・サウスウオーク聖堂では病者の塗油を、コベントリーでは子供たちに初聖体をそれぞれ授けられ、リバプールとヨークでは、それぞれ告解と婚姻の秘跡について詳しく述べられました。

ゆるし(告解)

聖霊降臨の日、イエズスは弟子たちにおおせになりました。「聖霊をうけよ。あなたたちが罪をゆるす人にはその罪がゆるされ、あなたたちが罪をゆるさぬ人はゆるされぬ。」(ヨハネ20・23) このお言葉は、人間のあがないの元となる恩寵、すなわち罪がゆるされる神と和睦できる恩寵を思い出させます。罪のゆるしは、全く惜しみなく無償で与えられる恩寵であり、私たちには身に余るものです。私たちが自身では決して得られない新しい生命の賜物なのです。神はそれを慈悲によって与えてくださいました。聖パウロが記してい

ます。「以上のことはみな神から出た。神はキリストによって、私たちをご自分と和睦させ、和睦の役目を私たちにゆだねられた。(コリント後5・18) 謙遜に、痛悔の心をもって、慈悲あふれる玉座(神)に近づくならば、すべての罪はゆるされるのです。神の無限のご慈悲はどんな悪よりも強力です。人間になられたイエズスは、われわれ人間の体験することをすべて体験なさいました。罪がもたらした最も残酷な結果である苦しみ、十字架上の死までもお受けになったのです。イエズスは罪以外のすべての点で私たちと同じ人間になりましたが、悪が総力をあげても勝利を得ることはできませんでした。キリストは、ご死去によっ

て私たちの死を打ち破り、ご復活によって私たちの命を回復させ、御傷によって私たちがいやし、罪をゆるしてくださいました。それで主は、ご復活の後、弟子たちの前にお現われになり、御手と御脇腹とをお示しになったのです。勝利を得たこと、そして、復活したキリストが罪と死の印を希望と命の象徴に変えられたことを弟子たちが理解するように、主はお望みになったからです。

十字架の勝利によって、イエズス・キリストは、私たちのために罪のゆるしと神との和睦を勝ち取ってくださいました。キリストが教会に聖霊をお与えになった時、私たちがいただいた賜物が、これすなわち、罪のゆるしと神との和睦の恩寵だったのです。以上がキリストの弟子たちに対する次のおことばの意味です。「聖霊をうけよ。あなたたちが罪をゆるす人にはその罪がゆるされる。」(ヨハネ20・23) 世界を「自身に和睦させる」というキリストの仕事で、教会は聖霊の御力によって続けていきます。いつの時代にも、教会は神と和睦した人々の共同体です。御父のみ旨に従う愛する御子が、犠牲をささげて実現させた和睦、その和睦を受け入れた人々の共同体なのです。

ることのできない希望と喜びをお与えになります。私たちが神と人々から分かつ柵を取り除いてくださる神のご慈悲が無尽蔵に豊かなものであることを、教会は秘跡を通して世に宣言するのです。

聖霊降臨の祝日である本日、教会がイエズスの和睦の業と聖霊の御力を宣言するとき、私は英国の信者の方々、そして私の声を聞き言葉を読む教会の中すべての人にお願ひします。愛するみなさん、生活の中でゆるしの秘跡を大切にしてください。私が最初の回勅で述べている権利、「回心と赦しの瞬間」という私の魂の最も重大な瞬間における私たちがひとりひとりとの出会いに対するキリストの権利」を守るよう務めてください。(『人間の贖い主』20 里脇訳)

兄弟である司祭方にとくにお願ひします。神との和睦という神的な仕事において、みなさんがどれほど親密で、どれほど効果的な救い主の協力者になることができるか、この点をよく理解してください。時間が足りないという理由で、大切な仕事を省いたり後回しにしなければならぬことがあるかもしれませんが、ゆるしの秘跡だけは別です。善き牧者の代理を務めるといふ、ゆるしの秘跡における司祭としての特別の役割をすべてのものに優先させてください。人間の心の中で聖霊がなされる素晴らしい働きをまのあたりにし、そして讚美するとき、みなさん方ご自身はさらに深い回心をせよ、キリストとその民をより一層深く愛せよ、というよびかけを感じることでしよう。

キリスト信者が世界中の和睦の源になるように努力すればするほど、いままでも以上に、まずキリスト信者間に完全な和睦が必要であると感ずることでしょう。何世紀もの間続いているキリスト信者間の不一致の罪は教会に重くのしかかっています。第二バチカン公会議においてこの罪の重大性がはっきりと示さ

れました。「このような分裂は明らかにキリストの意志に反し、また世にとってはつまずきであり、すべての被造物に福音をのべ伝えるという最も聖なる使命にとっては妨げとなっている。」「エキュメニズムに関する教令」キリスト信者間の一致の回復は教会の二十世紀最後の重要な課題のひとつです。これは私たちがすべての問題であり、だれもこの責任から逃れることはできません。小さなことのように思われても、実際だれでもなんらかの貢献をすることが出来ます。私たちが全員が個人的な回心への招きを受けています。この回心がエキュメニズム(教会一致運動)にとつての基本的必要条件なのです。第二バチカン公会議が教えています。「この回心と生活の聖性とを、キリスト者の一致のために行なわれる私のおよび公的祈願とともに、教会一致運動の全体の魂とみなすべきであり、当然、霊的な教会一致運動と呼ぶことができる。」「エキュメニズムに関する教令」(8)

すべての一致の源である聖霊は、キリストの神秘体を「豊かな賜物」で満たし、強められます。聖霊降臨の日、聖霊は弟子たちにとばの賜物をお与えになりました。その結果、イエルサレムに集まったすべての人がキリストのみ教えを聞き、それを理解することができたのです。救いの業を続けるためにも、キリストにおける一つの体として再び一致するためにも、必要な恩寵を与えてくださるよう、その同じ聖霊に願うべきではないでしょうか。聖霊により頼み、聖霊に祈り、聖霊降臨で聖霊が教会にお与えくださった御力を確信しましょう。

「御身が息を送れば……地の面は新たにされる。」「詩篇104・30」詩篇のこの言葉が今日の祈りの心です。命を与える聖霊の御力で地の面が新たにされるよう全能の神に願いつづける祈りです。主よ、光と真理の恩寵によって心と知力を新たにしてください。家庭と家

病者の塗油

族を一致の喜びの賜物で新たにしてください。私たちの町、国を真の正義と永遠の平和で新たにしてください。悔悛と和睦、信仰と愛における一致によって、教会を新たにしてください。主よ、聖霊を送りたまえ、地の面を新たにしまえ。

イエズスのみ名において挨拶いたします。私を迎えてくださったことを感謝します。あなたも、とくに病者の人、体の不自由な人、体の弱い人たちにお会いするのをとても心待ちにしていました。私自身も苦しみを味わい、傷と病から起こる肉体的弱さを知りました。苦しみを体験することにより、聖パウロが第二の書簡で語っていることを、いままで以上にはっきりと確信することができたのです。

「死も、命も、天使も、権勢も、現在も、未来も、能力も、高いものも、深いものも、そのほかのどんな被造物も、主イエズス・キリストにある神の愛から私たちを離せないのだと、私は確信する。」「ローマ8・38-39」

愛する皆さん、あなたがたに向けられた神の愛を、いかなる力や権勢も妨害することはできません。病や苦しみは、価値があると思われてはいるものや、人間の願いとすするものすべてに相反するように思われます。しかし、どんな病氣、負傷、弱さも、みなさんから神の子としての尊厳、イエズス・キリストの兄弟姉妹としての尊厳を奪い取ることはできないのです。

苦しみをいかに理解するかを、キリストは十字架の死によって私たちに示してくださいました。キリストのご受難の中に、腹立たしさから逃れるため、また、痛みを通して新しい生命へと向かうための、励ましと力とをみつけることができます。

苦しみとは、神のみ旨を行なう御子のよう

になれ、との招きです。苦しみは、罪から人を救うために死去されたキリストに倣う機会を与えてくれます。このように、苦しみがひとりひとり、そして教会全体を豊かにするの役に立つよう、父なる神は計画してくださいました。

病者の塗油の秘跡は一個人の人間全体のためのもので、この点は、典礼テキストに明示されています。「この油をそそがれるすべての人があなたの祝福をうけて、体と心の健康をとりもどし、すべての病氣と苦しみから解放されますように。」

病者の塗油の秘跡は霊魂と体の両方にとつて力の源となるものです。教会の祈りは、罪とそのなごりが取り去られるよう願います。体の健康を取りもどすことにより恩寵を増し、神とのより深い一致へと近づくこともあるので、この秘跡では肉体的健康の回復をも懇願するのです。

病者の塗油の秘跡に関する教令の中で、教会は聖ヤコボの手紙にある真理を述べ伝えます。「病氣の人がいるなら、その人は教会の長老たちを呼べ。彼らは主のみ名によって油をぬって祈り、彼らに主のみ名によって油をぬって祈り、病氣の人を救う。主は彼を立て、もし罪を犯しているなら、それを赦されるであらう。」「ヤコボ5・14-15」

心からの信頼をもってこの秘跡に近づかなければなりません。ちょうど福音の中らしい病人のように、絶望的な状態にあっても、信頼をもってイエズスに近づき、キリストが愛をもって治してくださること、そしてなにもキリストの愛から私たちを引き離すことではないことを確信しましょう。確かにイエズスはお望みです。「私は望む。治れ。」「マテオ8・3」いやされよ、強められよ、救われよ、と。

兄弟姉妹のみなさん、皆さんはキリストの受難をみずから体験しながら、信仰を証して

教会を強めることができます。忍耐と苦難と喜びをもってキリストの救いの御力を宣言できます。病氣と苦しみの中に十字架につけられたキリストを見出すことができますのです。ペロニカはカルワリオに向かう途中、キリストに介抱の手を差し出しました。ペロニカと同じく、キリストご自身をお世話する特権を与えられたかのように、私たちが信者は苦しみや悲しみのうちにある人々の世話をします。病人や診療所、あるいは臨終の床にある病人のために働いている人々に讃美と祝福を送ります。医者、看護婦、病院付司祭、そして病院職員のみならず、あなたがたの仕事は崇高な天職です。あなたがたが世話をする兄弟姉妹はキリストご自身であることを忘れないでください。

人間生活を律する神のおきてを理解し守る人々に心からの励ましを送ります。すべての人は、受胎の瞬間から最後の息までかけがえない神の子供であり、生きる権利もっていることを決して忘れてはなりません。行き届いた医療と看護、および法律によって、この権利は守られなければならないのです。一人ひとりの人間に命が与えられるのは天の御父のみ旨によるものであり、神の愛のご計画の一部分なのです。

いかなる国も人間の本性に根ざした道徳的価値を否定する権利も持っていません。これらの価値は文明の貴重な遺産です。社会が人間一人ひとりのうちを否定し、実利的・功利主義的思考を優先させはじめると、社会の根本的価値を保護するはずの防衛は破戒されてしまふでしょう。

この国に心からお祈いします。病氣の人や年老いた人々をながしるにしないでください。障害をもった人や臨終の床にある人に背を向けないでください。彼らを社会から疎外してはなりません。そのようなことをすれば、病人や高齢者が大切な真理を伝えてくれると

説教・講話・書簡等の抄訳

いとま聖母と共に

いうことを理解することもできなくなり、病人や年寄り、障害者の方々や死にゆく人が、弱さは人間の生活の創造的部分であり、苦しみは人間としての尊厳を失わずに喜んで受け入れうるべきものであることを教えてくれるのです。

この人々の存在がなければ、健康や強さや力だけが、この世で追い求めるべき価値あるものだと考えてしまうでしょう。神の知恵とキリストの御力は、キリストの苦しみにあずかる人々の弱さの中にこそ見い出せるものです。

病気の人、障害をもつ人を私たちの生活の中心としましょう。そのような人々を室とし、彼らに負うところがどれほど大きいかを感謝のうちに理解できますように。私たちはこのような人々に与えていると考えがちですが、いずれ、多くを受けているのは私たちの方です。

あることがわかるでしょう。神が苦しむ人々に祝福と慰めをお与えになりますように。病人をいやし、世をお救いになる主イエズス・キリストが、人間の弱さを通して、全人類を導くご自身の光を輝かせてくださいますように。アーメン。

愛する巡礼者のみなさんと同様、手にロザリオをもち、聖母のみ名をくり返し、心で神のご慈悲の讃歌を唱えながら、私はファチマへ巡礼にやってきました。「主は私に偉大なことをなさいました。(…)そのあわれみは、代々敬い畏れる人々の上にくだります。」(ルカ1・49-50)

みなさんとの集いにそなえて心の準備をしている間、みなさんの方で、聖母マリアへの信仰が遠い昔からしっかりと根づいていることを、私は十分味わい知ることができました。このことは、信仰の大きな表現となつてあらわれているばかりでなく、敬愛するポルトガル民族の歴史上重要な時期においても、また特に民族、家族、社会における日常生活や習慣の中にも、はつきりとみとめられます。聖母への信心が、みなさんの文化全体に行き渡っているのです。幾世紀にもわたってポルトガル伝来の血統を引き継いだ、素朴で、謙遜な人々の間で、正しい解釈を与えた広範な文化、言語、習慣が、キリスト教信仰と生活のなかでつねに脈々と生き続けていると言えらるでしょう。ある意味で、生活そのものが宗

今もなお生き生きと鮮やかによみがえり、よろこびのもととなります。ファチマは、巡礼に來られるあらゆる年齢の人々の祈りと犠牲によって、深い信仰につつまれている聖なる地です。同じ思い、同じ愛をもって、何はさておき、神に感謝を捧げるため、そして、神のご慈悲を乞い願うためにやってきました。絶えず、たゆむことなく神への忠実を保ち続けることができるよう切に祈り求めます。私たちの仲間であるすべての人が神の御子イエズス・キリストに対し信実、忠実を保つよう心から願います。みずからをキリスト信者と呼んでいる人々の教会の内部に、そしてまた、人類すべての家庭の中に、平和と愛をお与えくださいますように。

ての人々、つまり、巡礼に來ることのできなかった人々、および、巡礼を望まない人々の好意をもうけ、つつ(使徒行録2・47)この地を去ることができませんように。巡礼を望まない人々をも心から祝福し、愛の心と祈りをささげたいと思います。

また特に民族、家族、社会における日常生活や習慣の中にも、はつきりとみとめられます。聖母への信心が、みなさんの文化全体に行き渡っているのです。幾世紀にもわたってポルトガル伝来の血統を引き継いだ、素朴で、謙遜な人々の間で、正しい解釈を与えた広範な文化、言語、習慣が、キリスト教信仰と生活のなかでつねに脈々と生き続けていると言えらるでしょう。ある意味で、生活そのものが宗

祈りと償いの心で
感謝と交わりと生命、これがあれば、私たちが兄弟であり「同じ一つの場所に集う」巡礼者であることを身近かに感じる事ができます。私たちは現代の教会を形成し、この私たちのために聖霊降臨は今もつづいているのです。「イエズスの御母マリア」と共に集い、ここで、使徒たちの教えることと、兄弟的一致、パンをさくこと、祈りをする事に専念したいと望んでいます。(使徒行録2・42)

祈り合い、心注がれた神の愛なる聖霊に力づけられて(ローマ5・5)、聖地から戻ったあと、喜びをもって「神を賛美し、すべ

祈り合い、心注がれた神の愛なる聖霊に力づけられて(ローマ5・5)、聖地から戻ったあと、喜びをもって「神を賛美し、すべ

祈り合い、心注がれた神の愛なる聖霊に力づけられて(ローマ5・5)、聖地から戻ったあと、喜びをもって「神を賛美し、すべ

祈り合い、心注がれた神の愛なる聖霊に力づけられて(ローマ5・5)、聖地から戻ったあと、喜びをもって「神を賛美し、すべ

祈り合い、心注がれた神の愛なる聖霊に力づけられて(ローマ5・5)、聖地から戻ったあと、喜びをもって「神を賛美し、すべ

祈り合い、心注がれた神の愛なる聖霊に力づけられて(ローマ5・5)、聖地から戻ったあと、喜びをもって「神を賛美し、すべ

不変の教え

ヨハネ・パウロ二世教皇はキリストの聖体の祭日、六月十日午後、聖ヨハネ・ラテラノ広場でのミサのち行列のうちに「聖体をサント・マリア・マジョーレのバシリカ聖堂まで運ばれ、そこで聖体讃美式を捧げられました。」

「彼らは讃美歌を歌ったのちオリブ山に出かけて行った。」(マルコ14・26)

今日のマルコ福音の朗読はこの一節で終わっていますが、それまでのところでは最後の晩さんの準備に始まり、ご聖体の秘跡の制定に至るまでの様子が記述されています。

「彼らが食事しているとき、イエズスはパンをとり、祝してそれを裂き、一同に与え、『これをとれ。これは私の体である』と言われた。また盃をとり、神に感謝の祈りをとなえ、彼らに与えられた。彼らはみなそれを飲んだ。」(マルコ14・22、23)

すべてでは最大の配慮のもとで静寂のうちに行なわれました。最後の晩さんで制定された秘跡において、イエズスはご自身を弟子たちにお与えになりました。すなわち、パンとぶどう酒の外観のもとにご自分の御体と御血をお与えになったのです。以前イエズスがカファルナウムの近くで予告されたことが今実現したのです。カファルナウムで「聖体についてお話になったとき、大勢の弟子はその話が理解できず、イエズスのもとを去りました。『私は天から下った生きるパンである。このパンを食べる者は永遠に生きる。』(ヨハネ6・51) このお言葉を聞いても、弟子たちは進んで信じようとはしなかったのです。

そして今日、イエズスはあのとときの約束を果たされ、弟子たちは御からだであるパンを取って食べ、御血であるぶどう酒を飲みます。イエズスは聖杯を差し上げて、「これは私の血である、多くの人のために流される契約の血である」とおおせになりました。(マルコ14・24)

弟子たちは最後の晩さんの、食物・飲物として御体と御血を受け、新しい永遠の契約に与ったのです。そしてこの契約は、十字架にかけられた御体と、ご受難のあいだに流された御血によって、認証されました。キリストは更に付け加えられました、「まことに私は言う、神の国で新しいものを飲む日まで私はもうぶどうの実の汁を飲まぬ。」(マルコ14・25) 結局これが文字通り最後の晩さんになったわけですが、神の王国、未来の王国は、このように、ご聖体で始まり、世の終りまで発展していきます。

門出としての秘跡

最後の晩さんの後、オリブ山へ向かって出て行くとき、弟子たちはみな高間で起こったこの偉大な秘義を自らの内に秘めていました。

キリストは弟子たちと同行なさいます。この世に生きておられたからです。しかし、弟子たちは自らのうちにもご聖体のキリストを懐いていたのです。彼らは、後にキリストフォロイ、つまり、キリストを運ぶ人と呼ばれるようになった最初の人々でした。ご聖体の秘跡にあずかった人は確かにそう呼ばれました。秘跡にあずかった結果、人となられた神を自らの内に携えていたわけですから、心の中においてになる神と共に、弟子たちは日常生活を営みながら、人々の間に入っているのです。ご聖体は神がもっとも深くご自身をお隠し

ゆるしの秘跡とご聖体が 靈魂を自由にする

になる秘跡です。食物と飲物の外観のもとにご自分を隠し、また、そうすることによって人々のうちでもご自分を隠しておられるのです。それゆえ、この秘跡は人々の中にお隠れになる秘跡であり、そのため、キリストの特別の門出となる秘跡です。人々の中に入り、また、毎日の生活を織りなすすべての中心になる秘跡なのです。

ここで、キリストの御体と御血を盛大に祝う理由を考えてみましょう。

この祝日は歴史的に見れば十三世紀に生まれ、世界中のカトリック共同体において広がっていききました。しかしながら、この祭りの起りには、高間を出てオリブ山へ向かう弟子たちによる最初の行列であると考ええることができます。そのとき弟子たちはキリストを

取り囲むと同時に、ご聖体のキリストを心の中に運んでいたのです。今日私たちは同じ昔の伝統を行っています。祭壇でご聖体を祝い、心にうけます。私たちがを取り巻くすべてに向かい、ローマの道を行列をして進み、「キリストフォロイ」(キリストの運び手)としてご聖体を運ぶために。そして、すべてのもの、すべての人の前に新しい永遠の契約を示すのです。

私たちに与えられた主の恵みに「私に与えられた主の恵みに、何をもちて報いようか。救いの杯をあげ、主のみ名をこおう。」(詩篇116(115)・12、13) これは詩篇の言葉です。私たちはこの言葉が意味していることを果

たしたいと思えます。心の中におそらく毎日キリストを懐いている私たち、すなわち「キリストフォロイ」である私たちすべてが、与えられた主の恵みに、そして今も常にすべての人々に与えて下さる主の恵みに応えることができますように。

救いの杯であるご聖体の杯を取り、人々の前で、町中に向かって、世界中に向かって、主のみ名を呼びたいと思えます。

この町ローマにおいて、詩篇の最後の言葉が文字通り成就されたのではないでしょうが、「主に忠実な者の死は、その前に尊い。」(詩篇116(115)・15)

弟子たちと殉教者たちと聖人たちの町ローマは、すべての人にとって命のパンと靈的自由への御血となったご聖体をほめたたえます。「ああ主よ、私はあなたのための子で、あなたは私の鎖を解かれた。」(詩篇116(115)・16)

このように詩篇作者は自らを語っています。このように「キリストフォロイ」(キリストの運び手)は考えるのです。ゆるしの秘跡とご聖体を通る道が、この世の名利と邪心に対する罪と奴隷状態から離れさせ、霊における自由へと導くことを知っているのです。「いと聖なるキリストの御体と御血」の行列を行って、ローマの町と世界に対してキリストの証人になりたいものです。これは神と人々の前でどうしても表わすべき私たちの賛美と感謝の典礼なのです。

「賞賛のいけにえをささげ、主のみ名をこい、主への願いを果たそう、すべての人の前で。」(詩篇116(115)・17、18)

キリストよ、隠れたる神よ、私たちの賞賛のいけにえをお受けください。この人々の感謝とよろこびをお受けください。幾世紀も幾時代もたった後も人々は新しい永遠の契約の秘義を心にいだいているのです。(一九八二・六・十)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円 一年予約七百二十円送料七百二十円 二十部以上一括購入なら送料不要 郵便振替 神戸 3-72393